

トキ 野生復帰に向けて

12

トキを再び 佐渡の空へ “市民のつどい”

今回は、10月23日(日)に『アミューズメント佐渡』で環境省・新潟県・新潟市
の共催により開催しました。市民のつどいについて紹介します。

基調講演に先立ち、新潟県環境企画課の片桐明男係長から平成19年3月には現在新穂正明寺で建設中の順化センターが完成して野生復帰に向けての訓練が行われ、平成20年に試験放鳥をはじめ、平成27年には、小佐渡東部に60羽のトキを定着させるという計画の説明がありました。

基調講演の講師は、日本野鳥の会会長であり、コウノトリファンクラブ会長でもある俳優の柳生博氏で、「森と暮らす、森に学ぶ」と題して、「コウノトリのことやトキのこと、里山のことを熱く語ってくれました。」

「コウノトリ国際かいぎ」に参加した行谷小学校6年生の石塚久晃君からのメッセージを紹介し、今後はこのような子どもたちと自然の大切さを一緒に学ぶことにより、よい環境が継承されていくと訴え、環境教育の必要性を説いていました。

最後に「日本は、国土の70%が森林です。森林の国のイメージが強いカナダでも33%、ドイツは25%、ニュージー

ランドは21%。この数字を見ても、日本は森の国であることがよく分かります。この美しい日本を我々は守って、大人から子どもへ、孫へと受け継いでいかなければならない。そのためにもつと、もつとがんばろう。」と呼びかけていました。

「豊岡市でのコウノトリの放鳥は、2年前の8月5日に飛来した野生のコウノトリの存在が大きく、野生でのコウノトリの貴重なデータが得られ、放鳥に向けての貢献度は高かった。野生復帰は、日本だけでなく、世界のネットワークが必要で情報交換が大切であり、コウノトリやトキは、共有できる天然の資源として、観光面・環境面・産業面等で活用できる活動をみんなで進めていってもらいたい。」と話されていました。

各団体の活動報告は、新潟大学トキ野生復帰プロジェクトの三浦慎悟教授が、放鳥に向けての課題を取り上げ、「えさ場の拡大には、地域社会にその趣旨を十分理解してもらい、休耕田の利用やキャッチ水路の採用、冬水田ふゆみずたの普及拡大を図ってもらいたい。野生復帰には、ばく大な費用と長い時間が必要であり、気長に対応しなければならぬ。」と話していました。



講演中の柳生 博氏

基調講演に続いて「コウノトリの野生復帰について」兵庫県立大学の大迫義人助教が事例報告をしました。

「豊岡市でのコウノトリの放鳥は、2年前の8月5日に飛来した野生のコウノトリの存在が大きく、野生でのコウノトリの貴重なデータが得られ、放鳥に向けての貢献度は高かった。野生復帰は、日本だけでなく、世界のネットワークが必要で情報交換が大切であり、コウノトリやトキは、共有できる天然の資源として、観光面・環境面・産業面等で活用できる活動をみんなで進めていってもらいたい。」と話されていました。

各団体の活動報告は、新潟大学トキ野生復帰プロジェクトの三浦慎悟教授が、放鳥に向けての課題を取り上げ、「えさ場の拡大には、地域社会にその趣旨を十分理解してもらい、休耕田の利用やキャッチ水路の採用、冬水田ふゆみずたの普及拡大を図ってもらいたい。野生復帰には、ばく大な費用と長い時間が必要であり、気長に対応しなければならぬ。」と話していました。

続いて、新潟テレビ21 Team ECOときプロジェクトの田中健事務局長から、「ごみ拾いから始まった活動がトキの野生復帰をメインテーマとする活動になり、久知川、片野尾、生樽小倉の4地区で広がっています。島外からの多くのボランティア団体と交流を図りながら活動を展開し、参加した方々に自然の大切さと感動を提供して

いる。」との報告がありました。ただ残念なことに、島内からの参加者が非常に少ないので、今後は多くの島民から参加してほしいとの要望がありました。

最後に、NPO法人のトキとき応援団の仲川事務局長が「島内外のボランティア団体と交流しながら、それぞれの作業を手伝ったり、手伝ってもらったりしてボランティア活動の輪をこれからも広げていきたい。これらの活動を通じて、佐渡にある宝物を見つけ出したい。そういう意味では、トキはいろいろなものをもたらしてくれる我々の宝物です。」と締めくくりました。



活動報告パネル

環境保健課トキ推進室

☎ 22 3 1 1 1